

## 会員の広場



### 新五千円札「津田梅子」をめぐる人々

——父、山川捨松そして森有礼——

松下 滋（東京）

来春、新しい五千円札の顔は津田梅子になる。日本初の女子留學生のひとり津田梅子「1864—1929年」は、6歳で渡米、森有礼の斡旋で米人夫婦に育てられる。17歳で帰国後華族女学校などで英語教師として働く。だが、真の教育者になるには勉強不足と

再度渡米、プリンマー女子大学で学ぶ。そして1900年、女子に専門教育を与える最初の学校、女子英学塾「現・津田塾大学」を東京・麹町の借家に開いた。「英語の専門家にならうと骨折るにつけても、完たい婦人となるに必要な他の事柄を忽せにしてはなりません。完たい婦人即ち all-round women となるように心掛ねばなりません」「開校式式辞」と、一期生10人に語りかけた。専門教育にとどまらず、人間としての修養を目指した。梅子は、私の母が在学中に他界したが、その生涯を教育に捧げた。

彼女は、取り巻く人々に恵まれた。父・仙は、佐倉生まれ、藩主堀田正睦まさむねの影響を受けて蘭学を学ぶが、のち英学に転じる。田安家の家臣津田大太郎の養子となり、幕府の用務

で福沢諭吉などと通弁「通訳」として渡米した。明治になっては開拓使が企画した女子留學生募集にいち早く娘を応募させた。教育熱心で、留学直前まで、梅子に三田の私塾・三省堂で読書と習字を学ばせている。

ともに留学した4歳年長の山川捨松は、生涯の友だった。現地の高校から名門女子大学バツサーカレッジに進学、卒業式では優等生のひとりとして卒業演説を行なうほどの才媛だった。会津出身だが、帰国後、薩摩出身の大山巖陸軍卿と結婚。鹿鳴館を舞台に、外交や日本初の慈善バザーを開くなど、中心人物として活躍する。他方で、梅子の学校づくりを、米国における基金集めや英語教師の招聘など献身的に支援。開校後も、理事として同窓会長としてバックアップし続けた。

維新の大業という、今日とは比較にならない激動期の最中に、「国費で10年間少女たちを留学させる」。そんな長い時間軸での企画を進言したのは、幕末に英国留学した薩摩藩士のひとり森有礼である。「日本が生んだ西洋人」「伊藤博文」有礼は、新政府にあって「人斬り包丁は不要」と廢刀令を起案、男女同権の自説に従い福沢諭吉を証人に婚姻の誓約文を読み上げて結婚した。のちに内閣制初代文部大臣になる有礼が、外交官として在米中、訪ねてきた黒田清隆「開拓次官、首相」に、女子留学の必要性を訴え、米国での世話を約束。言行一致でそれを実践したのである。

梅子や捨松に思いをはせる時、大きな転換点を動かす要は教育にあることを、改めて実感する。